

生死の境を乗り越えて

静岡県 渡辺 よね

大正十三（一九二四）年九月に、栃木県矢板市の農家の長女として生まれました。きょうだいの多い貧乏農家でしたが、男の子が四人も続けて生まれた後の女の子でしたので、みんなからは大層かわいがられて育ちました。結局は男五人、女四人の九人きょうだいでした。

私の子供の時代は、大正末期から昭和初期の時代で、日本はもとより世界的な不景気で、世間は金融恐慌の嵐の中に巻き込まれていました。金の解禁を行った当時の総理大臣、浜口雄幸が東京駅で暗殺される悲惨な事件が起きたりと暗い世の中となり、これから先どうなるのか、と子供心にも気が気でなりませんでした。そのうえ、世の中の不況不景気と農村の疲弊とが相まって、関東、東北の農村の生活は貧乏のどん底に

なり、女の子は売り飛ばされ、男の子は口減らしに地主の家に住み込みで働かされたり、都会に小僧奉公に出されたり、と暗い日々でした。

六十キログラム入りの米（一俵）が四円か五円で、麦が三円そこそこだったと思います。街には失業者があふれていました。家族の多い我が家でも、その日その日の食べることだけでも大変なことだったろうと、当時の両親の苦勞を今になっても思っています。

そんな状況の中でまともに生きる道はただひとつ、独立国となった満州の開拓に新天地を求めることでした。

昭和六（一九三一）年、私が小学校一年生になった年の九月、柳条湖事件が起きて満州事変の発端となりましたが、その後、事変は拡大する一方で、昭和十二年七月には蘆溝橋での争いが起きて、とうとう戦争になってしまいました。その蘆溝橋事件が起きたときには、私は高等小学校の一年生になっていました。私の学生生活はすべて戦争の真ただ中でした。そんな四周の環境で過ごしてきた私は、満州へのあこがれで胸

がいっぱいでした。

滿蒙開拓者へ嫁に行くことは当時「開拓の花嫁」とか「大陸の花嫁戦士」とか言われて随分ともてはやされていましたが、今になって考えますと、実際は「国策の花嫁」と言うべきものだったのでしょう。敗戦後五十数年が経った今日では、その名を知っている人は極めて少ないことと思います。そんな時代があったことさえ知らない人が大部分ではないでしょうか。

生まれた時代が悪かったのだといえはそれまでのことですが、私は、あの世に行っても、あの時代のことを忘れることはできないでしょう。

その事の善しあしはそれぞれ考える人によって異なると思いますが、当時の私たちは開拓事業に誇りを持ち、生きがいを持って渡満したのです。その仕事を聖業と信じて、忠実に、日々立ち向かって生きていたのです。そんな気持ちがあれば、あの悲惨で地獄のような体験に耐えることはできなかったでしょう。

昭和十九年の十月中旬に、既に開拓団員として三江省樺川県干振^{チブリ}に入植していたすぐ上の兄、正が突然に

帰国しました。帰ってきた目的は結婚でした。相手は、私たちのいとこのなみ子でした。結婚式を挙げてしばらく滞在していましたが、昭和二十年一月に新婚夫婦は干振に戻りました。もちろん義姉となったなみ子も、夢と希望に胸を膨らませて渡満したのです。

その正兄が帰国してしばらく家にいたときに私にも結婚の話が持ち上がりました。それまでは、開拓の花嫁にはあこがれを持っていましたが縁がなく、家で農業を手伝いながら台所仕事をしていました。相手は正兄の同僚で、干振の大林義勇軍開拓団の江連益造でした。正兄は、江連はよい人間だから結婚したら、と熱心に勧めるのでした。

私も、あこがれの開拓団の人でしたし、正兄が勧める人だから間違いはないだろう、と考え二つ返事で結婚を承諾しました。正兄夫婦が干振に戻る前に結婚式を挙げました。

そのころになると、戦争もだんだんと緊迫の度を加え、満州に渡るにも簡単には許可が下りず、許可がなければ船にも汽車にも乗ることができない状況になっ

ていました。

まず、茨城県にある満蒙開拓青少年義勇隊本部の「内原訓練所」に行つて渡満の手続きをしてもらいました。私には、その訓練所で満蒙開拓義勇隊員としての基礎訓練に励み、いよいよ近いうちに卒業して満州へと出発する中村中隊の少年たちの面倒をみる寮母の仕事が与えられました。主人の益造は、私の上司である中隊指導員として渡満の許可が下りました。

いよいよ出発の日、内原訓練所長である加藤完治先生の出発にあたっての熱情あふれる訓話を聞き、地元内原周辺の住民の方々の「万歳！ 万歳！」の歓喜の声と打ち振られる日の丸の小旗に見送られて、内原駅から列車に乗り込みました。感激で涙が流れ落ちました。

中村中隊の行き先は吉林省の訓練所でしたので、私達夫婦は途中で一行と別れて三江省樺川県干振に向かいました。内原駅から列車で下関に行き、そこから関釜連絡船に乗船して朝鮮の釜山港に上陸しました。昭和二十年の三月上旬で、私は二十一歳になっていまし

た。

かつての満州行きの一般的な経路であった、新潟港または敦賀港から連絡船で清津港又は羅津港に行き、そこから汽車で満州国に入るといふ経路は危険が伴うため当時はもう許可されませんでした。そのため、アメリカの潜水艦の監視の目をくぐつて、現状では一番安全と思われる関釜連絡船を使いました。しかしこの経路でも、度々連絡船や漁船などが魚雷攻撃を受けて沈没する事故が絶えないとのことでした。無事に何事もなく朝鮮に渡れたことは、奇跡的と言わざるを得ませんでした。

玄海灘を越える時は大変なしけになり、生まれて初めての経験でしたので、それこそここで死ぬのではないかと考えながら、船室でごろごろと転がっていました。

息苦しい約八時間の船旅を終えて無事に釜山に上陸し、朝鮮鉄道で北上しました。朝鮮半島を縦走したのですが、まだ緑の少ないことを感じました。羅南にて途中下車をしました。羅南には長兄の清作が陸軍の部

隊に憲兵として勤務していましたので、久しぶりに兄と会い、私が結婚したことも知らせようと考えたからです。

兄は、妹夫婦がはるばると北朝鮮の地まで訪ねて来たことを大いに喜び、終始にこやかに迎えてくれました。官舎に案内されましたが、夢を見ているような気持ちでした。官舎には朝鮮人夫婦が住み込みで働いていて、朝鮮特有の煮物や漬け物など珍しい食べ物をいろいろと出してくれ、大変ごちそうになったことが思い出されます。

兄と別れて羅南駅から汽車に乗り満鮮国境を越え、あこがれの満鉄に乗り換えて大平原をひた走りに走り、牡丹江ポダンコウに向かいました。

やっとのことで牡丹江駅に着いた時には心も体もくたくたになっていましたが、すぐに市街にあるホテルに行き満州での第一夜を迎えました。そのホテルは親類の人が経営しており、その夜に主人の兄さんがわざわざ訪ねて来られました。兄と主人も久しぶりの再会で、積もる話で夜遅くまで話し込んでいましたが、私

は疲れていたためうつらうつらとして話も半分しか分からず、ときにはとんちんかんな返事をしていたそうです。しかし、異郷で身内と会って話をするということは、今までにない楽しさでした。

翌日、再び車中の人となりましたが、汽車がだんだんと奥地に向かうに従って吹く風も厳しく、寒さも一段とつよくなりました。車窓から見える景色も殺風景なもので、一望千里のところをただ線路と電柱があるだけでしたので、退屈しのぎに外を見ているうちに、知らず知らず涙が頬を伝わって流れていました。ハンカチで目を押さえていると主人が「どうした!」と声を掛けてきました。私が「何でもないので、ひとりで涙がでてきてね」と言うと、彼は「悪いなあ」と、つぶやくように独り言を言っていました。窓外では激しい風が吹き始めて土ほこりで遠くが見えなくなっていました。

やっと目的地の大林義勇軍開拓団に到着しました。満州開拓に腰を落ち着ける第一歩を、ここに踏み出したのです。

正兄夫婦が私たちを迎えてくれました。準備をしてもらった新居は、部屋が二間で土間が広く、馬小屋もあり馬が一頭つなげていました。反対側にはオンドルのたき口があり、勝手口となる土間には中国鍋が一つ吊り下げられていました。この鍋ひとつで煮たり焼いたりするのだと義姉から言われて、日本の台所とのあまりの違いにまず度肝を抜かれました。

夜は、まだ電灯はなく石油ランプの生活でした。ランプは矢板にいた当時でもすでに使っていませんでしたので、話には聞いていましたが実際にランプの下で過ごすことは初めてのことで、最初は物珍しく、何となく気持ちもうきうきしてきました。

三月の北満は、まだまだ春も遠く真冬と同じような寒さでした。特に夜間はぐーんと気温が下がり、外に出ると吹きつける風も強く震え上がるほどでした。一番苦労したのは水汲みでした。戸外にある井戸から汲み上げるのですが、この井戸が深くて底が見えないほどでした。井戸小屋に吊り下げられた滑車に太い針金

の水桶を沈めて水を汲み、それを力を入れて引き上げるともう一方の水桶が下がるという作業ですが、手が凍ったようになり、一杯の水を汲むのも一苦労でした。実家でポンプで汲んでいた時でも大変な重労働のひとつだったのに、ここではその比でなくきつい仕事で、水の大切さを思い知ったものです。

到着して三日目に、兄が「今夜は我が家で一緒に食事をしてしよう」と言ってくれましたので、喜んで兄の家に行きました。兄が「よね、こんなに遠くて辺りな所に連れてきてしまっただけなかなあ……」と、声を詰まらせながら言いましたので、私は「それは私の責任よ。自業自得というものよ」と、笑いながら返事をしました。兄はちょっと安心したような顔をしていました。

その時私は、実家での出来事をふと思い出しました。それは、私に結婚の話が持ち上がったときに、父が母に対して「よねを満州に行かせてはならない。この結婚には反対だ。よねにもそう言いなさい」と叱り声で言っていた事です。その時母は「本人が行きたい

と言っているのだからよいではないですか」とはつきりと言葉を返していました。しかし父は続けて「俺は前に、満蒙開拓の視察に行った時、正の家も見つきました。開拓団の生活がどんなものかはよく分かっています。かわいいい娘を崖の上から突き落とすようなことは絶対にできない。よねを欲しいという人はたくさんいる。先日も細川さんが、よねさんを息子の嫁にもらいたいと言っていた」と、少し語気を強めて言っていました。すると母は、「兄も出征しているし、よねも何かお国のためにしなければという気持ちで満州行きを決心しているのだから」と、これまた強い口調で答えていました。私はそのやりとりを聞くともなく聞いていたのです。この遠い満州に来てみると、改めて父母が私を満州にまで嫁にやることには、随分と心配し、かつ悩んでいたのだらうと考えてしまい、涙が出てきました。

そんなことを思っていると、突然兄がアコーディオンを取り出して弾き始めました。その曲は、東海林太郎の『人生の並木路』でした。

泣くな妹よ 妹よ泣くな

泣けば幼い 二人して

故郷を捨てた 甲斐がない

と、兄は自ら歌いながら弾きました。私がちょっとホームシックになっているのを見てこの歌を歌いだしたのでしよう。何かしら、じいんとくるものがありました。

その夜は遅くまで楽しく過ごしました。こんなに楽しく気持ちが和んだ日はその後あまりなく、その日のことは忘れられません。

春の遅い北満にも、五月頃になるとやっと春が訪れます。気分の良い毎日でした。昨年に種をまいた小麦畑もたわわに実り、農繁期がやってきました。収穫作業は、日本では考えられないような機械力での仕事でした。日本では、手で茎を束ねて鎌で一束一束刈り取るのですが、ここではコンバインという農業機械で作業をするのです。毎日、倉庫からコンバインを引き出し、麻袋を重ね合わせて馬車に乗せて畑に行き、コンバインを動かすと、それが小麦を刈り取りながらきれ

いに麻袋に詰め込むのでした。こんな収穫作業は初めての経験なので、私もつい夢中になって主人の言う通りに動き回っていました。その時、無我夢中で働いたことも、忘れられない思い出です。

私の人生においては、あこがれの夢が実現した、たったひとつの輝かしい事であって、農民として、土と共に生きていくことを覚悟してはるばるこの満州に來たのですから、充実した毎日でした。

開拓地があまりにも広大なので、仕事場に行くのが大変でした。家から本道に出るまでの間も遠く、本道を通って畑に行くのにも距離がありました。夕方近くになると主人が「早く帰ろうよ！」と声を掛けてさっさと帰り支度を始めます。こんなに早く帰ってもよいのかと内心気に掛かりましたが、家に帰り着くとちょうどよい時間になっていました。収穫作業は楽しい仕事でしたが、一番苦しかったのは、気候が良くなるに従ってブヨが多く出て困るので、布を袋状に縫って目の部分だけ穴を開けて、頭からすっぽりとかぶって作業をするので息苦しいことでした。

六月になると、馬を使つての小麦畑の掘り起こしが始まりました。主人と二人でそこに大豆のまき付けをしましたが、楽しい作業でした。私は何事にも主人の指示通りに働きました。

六月中旬になると、のどかで幸福に包まれた暮らしにも異変が起きてきました。働き手である男性の多くが召集されました。当然、主人も召集されました。思ひも掛けないことだったので、私はどうしてよいのか分からず頭の中が真っ白になり、何を考えることもなく数日を過ごしていました。

主人は「ひとりになつても、畑仕事をしなければならぬが頑張ってくれ」とひと声掛けただけで、後ろを振り返りもせずに東寧トウメイの部隊に向かって出て行きました。今日からはあの広い畑の作業もひとりではなければならぬと思うと、気がめいりました。

満州の短い夏でも作物はどんどん育ちますが、雑草もそれに負けじとばかりに伸びるので、草取りも大変な仕事でした。

いざという時のために国から預かっていた銃と弾

も、そのまま主人が私に預けていたので、押し入れの布団の間に入れ、すぐに取り出せるようにして隠しました。ここにどまつて毎日除草や家畜の世話をし暮らすことが、主人が後顧の憂いなく働けることなのだと自分に言い聞かせて、ずしりと重い責任を感じて固く決心をしました。団内の男性が次々と召集されていつてしまったので、皆で相談して共同生活をする

ことになりました。毎日、野良仕事を楽しみに、馬に乗って畑に行きました。大豆もずんずんと伸び、畑一面、青々と見えるようになりました。除草しなければ大豆の方が負けてしまいそうなので、チュートで丁寧に、精いっぱい努力をして作業に行きました。作業を終えて戻るときには、辺り一面に咲いている野の花を摘んで帰り、部屋に生けて主人の武運長久を祈りました。主人はどうしているだろうか、元気で無事に過ごすように、と思いをはせていましたが、時には寂しさが込み上げてきて涙が出て、一人で泣いていたことも度々ありました。そんな生活にも少しずつ慣れてきたころ、団本部から、ひとりでは不用心だろうという

ことで「ジョン」という犬をもらえることになりました。ジョンは、元軍用犬であっただけにとても利口で、すぐに私を主人と認めてくれました。外に出るとまるで私を守るようにして一緒に歩くのです。また、畑に行くとき私を見張り番の如くにそばを離れませんでした。私も、寂しさを紛らわしてくれるジョンを大事にしてかわいがりました。

栃木郷の一带は、桜草やその他の名も知らぬ小さな花が咲き乱れて、花の好きな私は夢の中にいるような気持ちになりました。ヒバリもさえずり空高く飛び回って、のどかな風情でした。これで主人がそばにいてくれたら、と思うと胸のつまる思いでいっぱいになります。雑草はどんどん伸びて、大豆の背丈と同じくらいになってきます。大豆を切らないようにして雑草を抜くのですから、随分と気を使う大変な仕事です。とにかく広い畑ですから、ひとりでは持て余してしまいます。それでも私は、主人と約束したことですから弱音を吐かずに頑張り続けました。ジョンは、私の周りを監視するような格好で付いていました。

一日が終わって家に帰ってからの楽しみは、お風呂呂に入ることでした。お風呂を沸かす仕事は当番制で七軒で受け持ちました。風呂当番の日は早めに畑から帰って、井戸から水おけで汲み上げて入れるので、これも大仕事でした。二時頃から始めると、皆が畑から戻って来るころには沸いていました。私が入っている時は、ジョンは風呂場の横で動くこともなく寝そべっていました。

満月の夜など、窓からこうこうと月の光が差し込んできて、床に就いて眺めていると矢板を思い出し、あのころの生活が懐かしくよみがえってきて、知らず知らずに涙が流れ始め、そのうちに主人のことに思いが及ぶと余計にわびしさが増し、眠れなくなってしまいました。

七月の終わり頃になると、戦況はだんだんと敗色濃くなってきました。はつきりしたことはよく分かりませんでした。新聞や開拓団本部の話の端々にも、「日本は危ない」とか「負けるかもしれない」というような空気がみなぎってきました。現地民はもっと敏

感に、日本の負けることを察していたようです。開拓団でもただならぬ様子になってきて、男という男は「根こそぎ動員」になって召集されていきました。

ある日、団本部より「今日から軍事訓練をするので全員集合せよ」という連絡が入りました。栃木郷からも、七人が銃を持って集合しました。教官は中島豊さんで、「まず、天皇陛下からお預かりしている銃を持つ心構えを教育する」ということで、「軍人勅諭」「五箇条の御誓文」それに「開拓女性綱領」を覚えるように、と手帳を渡されました。訓練は週に三日で、日ごとに厳しくなってきました。

銃の操作は、立撃ち、膝撃ち、寝撃ち、と本格的な射撃姿勢を訓練しました。日本でも、女性が木銃や竹槍で訓練をしているのは映画や新聞で見えていましたが、本物の銃で行う訓練は厳しいものでした。

八月になったある日、開拓団員全員に集合命令がかかりました。集まったのは女性三十四人、子供十三人、男性は中島教官を含めてたったの二人でした。銃と弾を携行し、主人の服を着て頭には戦闘帽をかぶり

巻脚絆姿で、まったく男のいでたちでした。

各家で、それぞれ営々として築き上げた財産はすべて置きっぱなしのまま、本部での集団生活となりました。ソ連軍の動きがおかしい、という理由でした。子供のいない身軽な立場にある私を中心として二人一組の歩哨係が二組作られ、夜になると警戒監視の任務に就きました。銃を持って団本部の入り口に立ち、「だれか！」と誰何^{すいか}するのです。本当に女性も男性と同じ心構えになり、全員でここを守ろうという気迫を持っていました。しかし、緊張の連続でした。

八月九日には、満ソ国境の全面からソ連軍が不意に侵攻してきて怒濤の如く満州を蹂躪しました。いよいよ恐れていたことが現実となっていました。「一体これからどうなるのか？ どうすればよいのか？」ともだえましたが、どうすることもならず、ただ、今の体制で皆で団結して対処していくことしかできませんでした。

今まで静かだった空にも、ソ連機の爆音が激しく聞かれるようになり、近くで遠くで爆弾の音が響くよう

になり、まさに身の危険を感じるようになりました。

中島教官は、「もう、この大林開拓団で生活することはないだろう。なるべく早く日本軍の駐屯しているところに行かなければならない」と言っておられました。日本軍駐屯部隊はこの周辺にはなく、一番近い所で依^イ蘭^{ラン}でした。「そこまで女、子供が徒歩で行くことは非常に困難である」と教官は嘆いておられました。

私は、「現地人にマーチョ(馬車)を出してもらおうように交渉して下さい」と頼みましたが、教官は「駄目だろう」と言うだけでした。私はその時、無意識のうちにとっさに銃を空に向けて引き金を引きました。女でも銃が撃てるのだということを示したかったです。皆びっくりしていました。側にいた現地人も「アヤヤー」と驚いていました。

中島教官は、こんな時に銃を撃つと他の人に不安を与える、と言って私を叱りましたが、私は死を覚悟しての行為だったのです。しかし結果的には、中島教官と現地人との間で話し合いがなされ、マーチョ十二台を出してもらうことになりました。このことが生死の

分かれ道になったのでした。

中島教官は、この大林義勇開拓団を去るにあたり、全員で『海行かば』の合唱をして、開拓団関係で戦病死された方々の霊に対して黙とうを行い、次いで『君が代』を斉唱して出発することを提案し、全員それに応じました。中島教官はご自分の立場を立派に果たされたのでした。

十二台のマーチョに全員分乗し、依蘭に向かって、思い出の多いこの開拓団本部を去りました。身軽な立場にあつた女性五人が先頭になり、「決死隊」と書いた白鉢巻きをして勇躍出発しました。こうなつたらいつ死んでもよい、という気持ちになっていました。

依蘭に向かう途中で、ソ連機からの銃撃を受けました。全員マーチョから飛び降り、辺りの大豆畑に身を伏せてじっとしていました。そのうちに銃撃の音がしなくなつたら、今度は「三江省入港万歳！」と書かれたピラが落とされました。ピラをまいた飛行機が去つてしまふと静かになりましたので、再びマーチョに乗って依蘭に向かいました。依蘭が近づくに従つて北

満の各開拓団などから集まってくる避難民の数が増え、二千人位の大集団となり長蛇の列をなしてしまつた。

遠くに依蘭の街が見え始めると、道端に軍馬の死骸があちこち散乱していたり、所々に戦車や自動車が破壊されたままになっていたりしました。ここで激しい戦いがあったのでしょうか、その戦いの場になくても良かった、と思ひました。

八月十五日にようやく依蘭の街に着きました。建物は破壊されて傾いており、広場は爆撃の跡でしょうか、あちこちに大きな穴が開いて見るに耐えないありさまでした。依蘭では、日本軍の官舎だつたところに入ることになり、昼のある一間が割り当てられ休んでいた時に、「日本が負けた」ということを聞きました。「明日からどうなるのか」「これからどうやって日本に帰るのか」など不安な気持ちでいっぱいでしたが、皆に話しても何の解決策もありません。ただ、何とか早くここを出て南に向かい、少しでも日本に近い所に行かなければ、ということだけは同じ考えでした。

このように気持ちもめいり、気力も体力も落ち込んでいると、日本の兵隊さんが来て、「あなた方、食糧はたくさんあるから皆で腹いっぱい食べなさい」と言つて、メリケン粉、カボチャ、ナス、油、砂糖などを持って来て下さったので、それを使って「天ぷら」を揚げました。私は揚げる役目で、夢中になって揚げていました。皆が喜んで食べる様子を想像しながら一所懸命に作業をしました。皆で食べ始めた時に、どこからか私たちを狙つて弾丸が飛んで来ました。私とはつさに木陰に身を隠しました。しばらくすると静かになりましたが、ここも危険だ、と感じました。再び食べ始めた時、中島教官が、「松花江を渡るぞ！」と叫んで走っていかれましたが、またどこからから狙い撃ちをされました。私の横を走っていた四歳ぐらいの男の子を引つ張つて身を伏せました。弾丸が頭上をビュンビュンと飛び、もうここで一生の終わりかと身を縮めて覚悟をしました。中島教官が大きな声で「全員、手拭いを頭にかぶれ」と言っていました。身を伏せながら手拭いを頭にかぶり、しばらくそのままの姿

勢でいると、やっと射撃が止み、辺りが静かになったので立ち上がり、その男の子を背負い、銃を右肩に提げて歩きました。

松花江の河岸に着くまでは、それこそ夢心地でした。河岸にはたくさんの方が集まっていました。それこそ生き地獄のような様相を呈していました。全身、血に染まった痛々しい姿の人もたくさんいました。私たちの一団には、そんなにひどい傷を負った人はいませんでした。中島教官の命令に従つて、一団となつて行動していたおかげだと思ひました。

松花江を無事に渡ることができましたが、依蘭から逃避する時に、それまで大事に背負ってきた荷物をほとんど置いてきましたので、身に付けている物のほかには何もありませんでした。もちろんマーチョもないので歩くだけでした。道なき道を歩き、山を越えてただひたすらに歩きました。

あるところで、日本軍の通信隊の人々が馬車で荷物を運んでいるのに遭遇しました。兵隊さんの一人が、「望遠鏡を持って行かないか？」と言うので、土屋さ

んがそれをもらい、持つて歩きました。それで辺りを見回すと、はるかかなたにトウモロコシ畑が見えました。皆何も食べていなかったの喜び、元気を出して畑に向かいましたが、あまりの空腹に我先にと生のまま食べ始めました。私は「生で食べたらお腹をこわすからやめなさい」と声を荒げましたが、皆はそんなことは全然聞かずに夢中になって食べていました。私は、近くにある枯れ木を集めて燃やし、焼きました。食べながら涙が出ました。やはり、どんな状態になっても食べるということはすべての行動の源です。その夜は久しぶりに満腹感を味わい、見張り小屋に入ってしまったでしょう。皆ぐっすり眠りこけていました。

朝になって目を覚ますと、何も見えません。目が腫れてしまったのです。一同、しまった、と後悔しましたが後の祭りです。それもそのはず、見張り小屋で久しぶりに横になってぐっすり眠ってしまったため、蚊の大群に全然気付かず、刺されるがままになってい

たのです。顔は腫れ上がり、手足には血がびっちりと付いて真っ赤になって、しばらくは歩くことも困難でした。

そのころになると、乳飲み子が次々と死んでいきました。食べる物もなければ、母親の母乳も出ません。乳が出なければいかんともし難いのです。母親の背で力なく泣くばかりで、母親は何もできず、周りの者も、どうしようもなくただ見ているだけです。八月の暑い日中では、大人でも水が飲みたくなりますが、飲める水もなく我慢しなければならぬつらさは、経験した人でないと理解できないでしょう。

死んだ子供は、橋の上から投げ落として水葬にしました。ひとりひとり火葬にしてお骨を持っていく時間も場所もないので、この方法しかなく致し方ないと思きらめてのことですが、それでも情けなく、悔しい思いでいっぱいでした。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と、皆で手を合わせてお別れをしました。母親にしてみれば、我が身を削ってでも何とか生かしたいと思っ

は、それこそ筆舌に尽くせないものです。川に流されて見えなくなるまで泣きながら見送っていました。

「ああ。あの子の着ている物は、誰にも脱がされないように！」とひとりでつぶやいている母親もいました。周りの人たちは「大丈夫よ。大丈夫だわ」と力付けていましたが、果たしていつまで着たままで流されていられるか、保証はできませんでした。水葬するのを見ている現地人が待ち構えていて、すぐに脱がせてしまうのでした。

途中の部落では、「日本人に親切にははいけない、見付けたらすぐに罰する。」と言われているので、すぐここから出ていってもらいたい！」と言われましたが、ある朝鮮部落では、同情して水を飲ませてくれました。思う存分に水を飲み、やっと人心地がつきました。逃避行の間、非常にひどい仕打ちをする人、見て見ぬふりをする人、親切にいたわってくれる人など、現地人でも人それぞれで、私たちに接する態度は千差万別でした。

そこで水を一口飲んで死んでしまった子供がいました

だが、部落の人の親切な指示で畑の隅に穴を掘り、土葬をすることができました。付近に咲いていた野花でその周囲を飾りました。水葬にした子供たちよりは、少しはましな弔いができました。私は水を供えて、「随分、飲みたかったでしょうね。さあ、思う存分飲んでね。本当にかわいそうだったわね」と、言葉にならない言葉で話し掛けながら泣きました。悔しいことでした。

私たちは、まだ銃と弾を持っていましたので、山中に入って間道を探し、南へ南へと歩いて行きました。大徳密という部落を通った時、その部落の長老のような中国人に会いました。その人に、「あなた方、山の中を進むとしても、これから先の寒さはどうするのですか。冬が近くなるに従って寒さも厳しくなり、そのうえ空腹となると、凍えて、生きてはいけませんよ。よく考えて行動しなさい。今夜はここで一泊しなさい。明日、日本人が集結している方正カウセイに案内してあげるから」と、懇々と諭されました。なるほどそうだと思います、皆と相談して、ここまで持ってきた銃を分

解し、山の中に捨てて、その部落に泊めてもらうことにしました。五人の子供たちはゆで卵を食べさせてもらい、久しぶりのごちそうをとて嬉しそうに食べていました。現地人の中にもこのように親切な人がいたことは、忘れることのできない思い出です。私たちも夕食をごちそうになりました。それこそ大林開拓団を出てから初めて、温かい食事を安心して食べる事ができたのです。その夜は、ゆっくり足腰を伸ばして寝ました。

翌朝、長老たちに見送られて方正に向かいました。「ソ連兵に出会ったら、親指を立てて歩きなさい」と言われ、その通りにしました。途中で、逃避行の中で出会った顔見知りの人にも会い、「あなた方は随分と遅かったのね。遠回りをしたの？」と言われたりしました。「明日は、皆ここからも出発するのよ。間に合つてよかつたわ」とも言われてしまいました。方正には日本の兵隊さんもたくさんいました。その中の人から「僕の服と、あなたの服とを取り替えてほしい」と申し入れられ、義勇軍の服と兵隊さんの服とを取り

替えました。

いよいよ方正からの大移動が始まりました。ソ連の監視兵によって、男は右に、女、子供は左に並ばされて、線路沿いに歩き始めました。私は、団員の男の子を背負って歩いていましたが、横にいた男の人が背負ってくれましたので身軽になり、大変に有り難く助かりました。しばらく歩いた後、汽車に乗せられました。私たちは無蓋車でしたので、お互いに、振り落とされないように手をつなぎ合つて乗りました。汽車は南に向かつて走り、しばらくして停車しました。そこは一面坡イナクハという駅で、構内に二泊しました。一日目は何事も起こらず無事に過りましたが、二日目の夜に事件が起きました。

ソ連兵が、構内に止まっていた汽車に、どやどやと靴音を響かせて入ってくると、近くにいた一人をつかまえて、のど元に自動小銃の銃口を突き付けて乱暴をし始めたのです。周りの人たちは、助けようとすると何をされるか分からないので手も足も出ず、なされるままにうずくまっていました。私が「時計をあげるか

ら、その人を放して下さい」と叫んで、大事に持っていた腕時計を外して渡しますと、ソ連兵はその時計をひったくると同時に、私が被っていた帽子も取り上げました。その帽子には、いざという時のためにお金を縫い込んでいたのです。大切な帽子も、あつという間もなく略奪されてしまい取り返すこともできませんでした。ソ連兵は勝ち誇ったように、口笛を吹きながら貨車を降りていきました。捕まえられていた人はほっとしていましたが、私がかかりしてしまいました。大事に持っていたお金を取られ、手元にはもう一銭もなく、これからどうしたらよいのか、と考えてしまいました。このひとときは生き地獄のようでした。しかし、同じ苦勞をしてここまで来た人が助かったのですから、以って銘すべきでした。

三日目の朝、避難民を乗せた汽車は、やっと横道河子オホラカに向かつて動き出しました。相変わらずの無蓋車でしたので、振り落とされないようにお互いに手をつなぎ、子供はその輪の中に入れました。横道河子駅に到着し、貨車から降ろされて、徒歩で梅林に行きまし

た。ソ連兵が、監視のため行列の両側を銃を構えて歩いていました。梅林で、日本人捕虜收容所に入れられました。横道河子を經由して南下した日本軍の捕虜集団に対して、大林開拓団に妻子のいる人は、シベリアに送られずに、梅林の捕虜收容所に行かせると言われていたそうです。收容所に着くとすぐに、開拓団の大森さんと医者イサの駒木さんが、嬉しそうにしてやってきました。大森さんには二人のお子さんがおり、赤ん坊だった恒男ちゃんは途中で亡くなっていました。が、小夜子ちゃんという女の子は元気でここまで来ましたので、大森さんも少しは救われた様子で、話しかける顔も嬉しそうでした。

私は、栄養失調のため黄疸にかかっており、水のよいうな食べ物でも喉を通らず重症でした。駒木先生がすぐにソ連軍の医務所に行き、薬と注射液をもらってきて治療をして下さいました。食べ物も無理をしてでも食べないといけないと言われる、食欲はなかったので無理をして食べました。

梅林收容所には二十日くらい滞在しました。冬に向

かっているので少しでも暖かい所に、ということだけで奉天（瀋陽）行きを希望していました。ソ連軍との交渉により、全員奉天に行けるように証明書が渡されました。行き先が決まり、皆ほっとしました。私の病気もどうか、皆と一緒に行動できるくらいに回復してきました。

また無蓋車に乗せられてハルビンに向かいました。ハルビンまでは順調に行き、駅構内に一晚留められて、次の日の夕方に別の貨物列車に乗り換え、奉天に向かいました。大林開拓団は全員同じ貨車に乗せられました。知った人ばかりだったので、随分心強い旅になりました。少しばかりの米の配給もあり、鍋がないので飯盒で列車が止まっている間に炊飯し、交代で食べました。用便も、山の中に列車が止まった時に急いでしました。恥ずかしいなどと言ってはおられませんでしたが、乞食同然でした。

三日後によりやく奉天駅に着きました。私たちは日本人の避難民として初めて奉天に入った一団だったので、二列に並んで市街を歩かされました。途中で、

奉天在住の日本人の方々が寿司を立ち売りしており、「お腹が空いているでしょう。どうぞこれを食べて下さい」と言ってくれました。私が海苔巻きを一本食べたいと思いつながら言葉が出ず、ちゅうちょしていました。「どうぞ！」と言って、私の手に一本渡して下さいました。嬉しくて涙を流しながら食べたことを思い出します。奉天では、青葉町のビルの二階奥の部屋が割り当てられ、そこで休みました。奉天在住日本人会の人々が、おにぎりやお茶や衣類を持って来て下さいました。「同じ日本人」という同情に感謝感激しました。その後、春日町に移り、栃木県の人達と共同生活をしました。日本を出て以来の、畳部屋での生活は懐かしさでいっぱいでした。同室六人で頑張ろうと決意しました。

私たちは醤油を製造して売ることにしました。売りに行くのは私の仕事です。一日目はよく売れて喜びましたが、そのうちに売れなくなってしまいました。

その頃、義姉が女の子を出産しましたが、すぐに亡くなりました。大森さんに頼んで砂山という所に埋葬

してもらいました。別れる前に正兄が、もし女の子だったら「正子」と名付けるようにと言っていましたので、「正子」と名付けて埋葬しました。

生活がだんだんと苦しくなってきたので、私は働きに出ましたが、勤め始めて十日くらい経った頃、駒木先生の奥様が私を捜しに来て「あなたを不幸にはできない」と、涙を流して言われました。「そんなに私の事を心配して下さって」と、私も涙声で応じました。

日本人の病人の世話をして下さいと言われ、看護婦は二人いたのですが、私は付き添い婦として勤めることになりました。一カ月くらい経って、同じ開拓団の館野さんが私を頼って入院してきました。私の顔を見るなり懐かしい、懐かしいと言って涙を流していました。私も「よく来たね」と言って喜び合いました。館野さんは、「日本に帰りた、日本に帰りた」という一心から、精神に異常を来していたそうです。

そのうちに私も、疲労から下痢が続き、歩くこともままならなくなり床に伏しましたが、そのまま何日か眠った状態になってしまいました。その時に私は、臨

死体験をしました。

暗いトンネルの中を、私はスピードを出して飛ぶようにして歩いていました。トンネルを出ると、太陽が燦々と輝き、大きな川が流れていて、そこに私がひとりで立っていたのです。川の向こうには、亡くなった義姉や、大森小夜子ちゃんや、桑島さんたちが野良着姿で私を手招きして「おいでよ。おいでよ」と言っているのです。私が「川が深くて行けない。駄目だわ」と言うと、三人は「とても良い所なのにねえ」と言って、楽しそうに笑っていました。

私はその時、「水が！ 水が！」とうわごとを言っていたそう、それを聞いた香川県の方は、コップでサイダーを飲ませながら「いよいよ最期か」と言っていたそうです。そのサイダーで、私はこの世に戻されたのです。飲んだときのおいしさが今でも頭に浮かびます。それから私の体はぐんぐんと良くなり、再び働きに行けるようになりました。私は、一度あの世とやらに行き、また現世に戻されたという、他人にはない経験をして今の身は生かされているのだ、と思い、献

身的に働きました。

昭和二十一年十一月八日に、日本人最後の留用者を解除されて胡盧島に向かい、アメリカの輸送船V61号で博多に引き揚げ、すぐに故郷の矢板に戻りました。

元氣だった母は、私が引き揚げてきたので安心したのか急に体が弱り、翌年六月、私の看護に満足して亡くなりました。これからの生活で一番頼りにしていた叔母も、同年十月、母の後を追うように、あの世に行ってしまいました。

それからの私には、言うに言われぬ不幸が続きました。自分では力の限り頑張ってきたつもりですが、だんだんと疲労が重なり夢遊病者のようになり、女性として心身共に失格となり、一人前の人間ではない、と思う反面、残った力を全部出して人並みに人生を送りたい、と思って毎日を過ごしてきました。

昭和三十四年十月、人生の転機を求めて熱海に移りました。ここは私の憧れの地でもあったのです。一年ほど旅館で働き、マッサージ師で身を立てようと思いい住み込みで勉強し、資格を取りました。そして、某大

会社の寮に治療に行くようになり、いろいろな方にお目にかかるようになりました。ある時、アメリカの要人が私に「何か望みがありますか？」と言われましたので、「私は中国からの引揚者です。友人やその子供たちが無惨にも若い命を捧げたあの悲劇を少しでも慰めたい。早く中国との国交が回復したら多くの人が喜ぶでしょう」と申しました。その方は何度もうなずいて、私の話を分かって下さったようでした。

食べることができるのに食べる物がなく、空腹に耐えたまま骨と皮ばかりになって死んでいった人たちを、私はどうしても忘れられません。今の私たちは、その人達の尊い犠牲によって生かされているのです。

「戦争は、決して人を幸せにはしません。弱い人たちが苦しむだけです。」